

# 「活動の概要と研究成果」

NO.J2406

活動題目:カンボジア初期上座部仏教寺院の成立  
—中世カンボジアにおける「上座部仏教国」化の過程と実態—

所属:早稲田大学文学研究科 博士後期課程

氏名:下田 麻里子

本研究は、前近代カンボジアにおいて上座部仏教社会化の拠点となった初期上座部仏教寺院の成立過程を明らかにすることにより、宗教および社会の変容実態を解明することを目的とした。ヒンドゥー教・大乘仏教を基盤とする社会から、現在まで続く上座部仏教社会へと大きく転換したカンボジアにおいて、上座部仏教の受容とその意義を、物質文化的側面から明らかにしようとするものである。

現在に至るまでカンボジアにおけるポスト・アンコール時代(ca.1432-1863)研究は、史料の欠落や調査不足により立ち遅れており、上座部仏教の導入と成立の実態は、解明されていない。そこで、本研究ではこれまで断片的にしか把握されてこなかった初期上座部仏教寺院の実態を考古学的・建築学的手法によって体系的に分析した。寺院の中核である聖域、ストゥーパや仏教祠堂、儀礼空間、シーマー石(結界石)などの構成要素の形態と編年を精査し、構造的変遷を明らかにするとともに、それらの統合的検討を通じて、カンボジアにおける初期上座部仏教寺院成立過程のモデルを提示した。

その成果として、上座部仏教の受容と内在化を示す二つの重要な視点が得られた。第一に、各構成要素において初期から常に二系統の形態的發展が併存していたことが確認され、外的影響による一方的な受容ではなく、在来の文化的伝統や思想を積極的に取り込むかたちで上座部仏教が形成されていたことが明らかとなった。これは、カンボジア独自の仏教文化形成の動態を示す重要な証左である。

第二に、上座部仏教寺院の建築形態には三度の顕著な変革が認められ、これらの画期は単なる宗教建築の変遷にとどまらず、為政者が上座部仏教を通じて新たな政治的秩序を構築しようとした時期と重なる可能性が高いことが示唆された。こうした知見は、宗教と国家の関係を理解するための一助となり得るものであり、前近代カンボジア社会における宗教と権力構造の連関を考えるうえで、今後の議論の基盤の一端を提供するものと考えられる。